



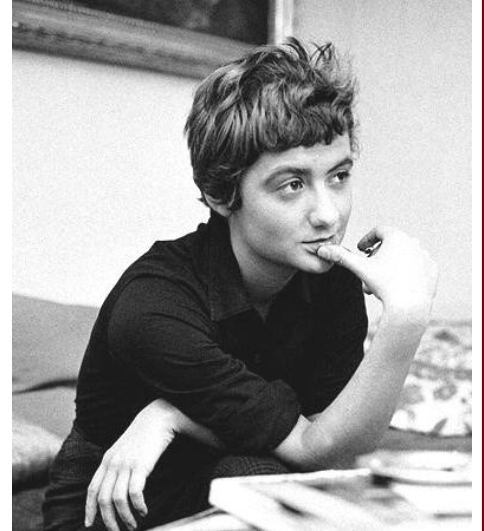
世界のトップ・アーティストたちの注目の公演

MUSE CONCERTS PICK UP

ブラームスはお好き！？

フランスの作家サガンが23歳で書いた小説『ブラームスはお好き』。社会的にも独立し成熟した39歳の女性ポールを、25歳の心優しい青年シモンが、パリでのコンサートにさりげなく誘う有名な一節である。— Aimez-vous Brahms? — 「ブラームスはお好きですか？」シモンが初めてポールを誘ったコンサートで二人が聴いたのは、ブラームスのヴァイオリン協奏曲だろうか！？あるいはこの小説が映画化された際に使われた交響曲第3番だったのか！？いやいや、美しい旋律が次々と歌われ優しい抒情に溢れる交響曲第2番が、まだ淡い二人の恋心にぴったりだ、と思う方もいるかもしれない。

二人が何を聴いたのかはハッキリしないが、25歳の純真なシモンは14歳も年上の美しい女性を誘うのに、いろいろ考えた末、たぶん、ちょっとだけ背伸びをして、ブラームスのコンサートを選んだのではないだろうか。そう、フランスでもドイツでも、日本でも、ブラームスはちょっと大人な音楽。楽しく甘いだけではない・・・。少しの苦みと共に人生の郷愁を感じさせる音楽なのだ。サガンの小説は、ブラームスの音楽が宿すこんな本質を見事にとらえている。



若き日のフランソワーズ・サガン

N響&ルイージの未来を占う。



©Monika Rittershaus

さて、この9月、N響の首席指揮者に就任するルイージが早くも所沢ミュージックに登場するわけだが、イタリア生まれでありイタリア・オペラの名演奏でキャリアを築いてきたルイージがなぜドイツ音楽？と思う方もいるかも知れない。しかし、ドイツ音楽の権威であるサヴァリッシュを恩師と仰ぐルイージは、ブラームス、ブルックナーなどのドイツ音楽に絶対の自信を持つ。これまで様々な楽団や歌劇場のポストを務めてきた豊かな国際性から、イタリア人だからイタリア音楽、ドイツ音楽はドイツ人という安易な類型化を否定し、新聞の取材にも「音楽を特定の国と結び付けて語る時代ではもはやありません。オーストリア人のカラヤンは優れたイタリア・オペラの指揮者でしたし、私も（ドイツの）R.シュトラウスが大好きです。」ときっぱり。所沢のN響と言えばプロムシュテットによる《運命》が記憶に新しいが、ルイージはプロムシュテットやサヴァリッシュとはひと味もふた味も違う、新時代のN響にふさわしいブラームスを聴かせてくれるだろう。そして、その演奏はN響とルイージの輝かしい未来を指し示す重要な意味を持つだろう。

さあ、貴方も素敵な誰かを誘って、ブラームスを聴きにでかけよう♪



首席指揮者就任記念 9月24日 [土] 14時開演 ファビオ・ルイージ指揮 N響 詳細は→